



TITLE:

マルサス『人口論』の人間觀的基礎

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

CITATION:

白杉, 庄一郎. マルサス『人口論』の人間觀的基礎. 經濟論叢 1942, 55(2): 192-209

ISSUE DATE:

1942-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131702>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

第五十五卷 第二號

昭和十七年八月

論叢

全體主義的經濟論理……………

經濟學博士 柴田敬

戰時船舶全面的徵發への行程……………

經濟學士 佐波宣平

強制カルテルについて……………

經濟學士 靜田均

時論

世界的論理の轉換者日本……………

經濟學博士 石川興二

研究

マルサス『人口論』の人間觀的基礎……………

經濟學士 白杉庄一郎

二つの型の現金殘高……………

經濟學士 一谷藤一郎

フランス植民帝國の問題……………

經濟學士 河野健二

說苑

近世絹織業の分析視角……………

經濟學士 堀江英一

附錄

彙報

研 究

マルサス『人口論』の人間觀的基礎

白 杉 庄 一 郎

私は本誌上二回にわたつてマルサスの『人口論』の根柢となつてゐる哲學的思想について敘述するところあつたが、ここにその批判をかねて『人口論』の人間觀的基礎とも云はるべきものを問題にして見たいと思ふ。

『人口論』の根柢となつてゐる人間觀として特に我々の注意を惹くのは、マルサスが人間を本性懶惰にして不活潑なものと見、懶惰にして不活潑な人間を驅り立てて努力せしめるためには不斷の強烈な刺激が必要であるとしてゐる點である。人口原理の人類に對する積極的肯定面を意味づけてゐる彼の世界觀や倫理觀にしても、この種の人間觀を前提して初めて成立し得るといつた側面をもつてゐた。即ち、彼の見るところによれば、世界と人生は「人間の不活潑な存在を覺醒し高尚な享樂の能力を獲得せしめる」神の偉大な創造過程であつたのであつて、例へば肉體の欲求の如きも神が人間を勤勉ならしめるための刺激にほかならなかつた。

「野蠻人は饑餓の要求または寒氣の壓迫によつてその無氣力から覺醒せしめられないならば永久に樹の下に眠

1) マルサス『人口論』の形而上學的基礎(昭和十七年二月)、マルサス『人口論』の倫理學的基礎(同四月)。

つてゐるであらう。而して彼が食物を獲得し自ら隠れ場を作ることによつてこれらの害悪を避けるためになす努力は、然らざれば無頓着な不活潑に沈潜するであらう彼の能力を形成し運動せしめる鍛鍊である。人間精神の構造に關して總ての経験の教へるところによれば、肉體の欲求から起る努力に對するこれらの刺激が人類大衆から除去されるならば、我々は彼等が閑暇の所有によつて哲學者の列に引上げられるよりは、むしろ刺激の缺如から獸類の水準に落ちこむであらうと考ふべき遙かに多くの理由をもつてゐる。自然の產物が最も豊富な國々に於ては、住民の知性の最も顯著な鋭敏さは見出されないであらう。²⁾

マルサスによれば、怠惰と不活潑は野蠻人に見られる性質ではなくて人間一般の本性に屬する。空想によつて構成された人間ではなくて現實にあるがままの人間は、特殊の例外的な人間ではなくて大多數の人間は、生來懶惰であり不活潑である。この見地から彼は、「閑暇は疑ひもなく人間にとつて極めて價値のあるものである、然しあるがままの人間を見ると、大多數の場合それは善よりもむしろ惡をもたらすであらうと云ふ方が事實に近いやうに思はれる。」と言つてゐる。³⁾

人口が食物よりも遙か速かに増加するといふ所謂人口原理も神が人間を驅り立てて土地を充分に耕作せしめるための刺激にほかならない。即ち曰く。「我々が人口原理に立歸つて、人間があるがままに、即ち必要によつて強制されなければ不活潑にして遲鈍であり勞働を嫌惡するものと考へるならば、而して我々の粗雑な空想に従つてあり得るかも知れぬ人間について語ることは確かに愚の骨頂である、我々は生活資料に對する人口増加力の優越といふことがなかつたならば、世界は人間の住むところとならなかつたであらうと斷言して誤りでないであらう。……この不斷の刺激がはたらく下に於てさへ、自然の豊度の最も大なる國々に住んでゐる野蠻人は長い時期

2) First Essay on Population 1798, reprinted London 1926, pp. 357—358.
3) ibid. p. 370.

を經過した後でなければ牧畜もしくは農業に従事しないであらう。もし人口と食物とが同じ割合で増加したならば、人間は恐らく野蠻狀態を脱却しなかつたであらう。」⁴⁾——同じ思想は第二論文の諸所にも繰返へされてゐる。

「人類初期の移動と植民の歴史は、彼等を促した動機と共に、生活資料以上に増加せんとする人類の不斷の傾向を顯著な仕方に於て例證するであらう。このやうな性質をもつた何らかの一般的法則がなければ、世界は決して人間の住むところとなり得なかつたであらうと思はれさへするであらう。忍耐や活潑ではなくて懶惰の狀態が明かに人間の自然狀態であるやうに思はれる。そしてこの忍耐や活潑な性向は、後には習慣および習慣から形成された新しい結合や進取の精神や武的名譽の渴望によつて持續せしめられはするであらうが、然し初めは必要といふ強い刺激によるのほか發生せしめられ得なかつたのである。」⁵⁾

また曰く。「我々は地球が滿されるといふことが造物主の目的であると考へざるを得ない。そしてこの目的は人口が食物よりも速かに増加する傾向なくしては實現され得ないであらうといふことは明かであるやうに私には思はれる。……生活資料の供給よりもはるかに増加せんとする人口の強力にして普遍的な努力がなかつたならば、生活資料に對するその欲望はその結果に於て比較的局限され、人間の能力の改善に極めて必要なかの一般的活动を生産することができないであらう。もしこれら二つの傾向が正確に均衡を保つとすれば、周く承認されてゐる人間の懶惰を克服し彼をして土地の耕作に進ましめるに足るほど強力な如何なる動機があるであらうかを私は知らない。」⁶⁾

マルサスの見るところによれば、人口原理は様々の害惡の根源であると同時に、人間を勤勉ならしめ地球に人

4) ibid. pp. 363—364.

5) Principle of Population, 7th ed. p. 45.

6) ibid. p. 395.

を満さんとする神の意圖を體現したものであつた。従つて彼は、人口原理に由來する害惡を免れるために所謂産兒制限の如き人爲的人口制限の方法をとることをもつて就中勤勉に對する必要な刺戟を除去するものとして之に反對し、さうした弊害を伴ふことなしに神の目的を達成する方法として所謂道德的抑制の方法を提唱したのであつた。これらの點については既に詳しく述べた。ここで繰返へして置きたいと思ふのは、右の如き人口原理の意味づけとそれに對する人間の實踐の基礎づけが可能であり得るためには、人間の本性を懶惰と見る人間觀が前提されねばならなかつたといふことである。人間は本性怠惰であつて不斷の刺戟がなければ努力しないと考へることによつてマルサスは人口原理の積極的意義を主張することができたのである。その意味でこの種の人間觀は『人口論』の基礎となつてゐると云へるかと思ふ。

二

右に述べた如きマルサスの人間の本性を怠惰と見る人間觀は形而上學的非實踐的な彼の世界觀を基礎づけるものであると同時にその歸結でもあつた。彼の見るところによれば、世界は精神の創造と形成のための偉大な過程であつた。然し創造者は世界でも人間でもなかつた。創造者は世界の外にあり人間を超絶した自然の神であつた。世界も人間も共に神の單なる創造物に過ぎなかつた。世界が人間を生み、生まれた人間が創造的世界の創造的要素として世界を作り自己自身を作るといふのではなかつた。人間は創造の主體ではなくて、神の創造の客體でしかなかつた。物質的にして不活潑な人間存在は神の手によつて活氣ある精神的存在にまで高められるのであつて、精神や肉體の欲求もそのために興へられた刺戟にすぎなかつた。

然し人間はどこまでも創造的なものでなければならぬまい。肉體や精神の欲求をもつことによつて、環境から規

定されながら而も環境に働きかけて行くものでなければならぬ。欲求なくして人間といふものは考へられない。それは人間を超えたものによつて興へられる刺激ではなくて、人間の生命の自己活動といふことから起つてくるのでなければならぬ。そして欲求をもつことによつて人間が環境からの刺激に應へて環境に働きかけて行くといふところに、人間の本性が創造的ないし活動的であると云はるべき根本があるのでなければならぬ。このことは文明人は勿論、野蠻人にも、生きとし生ける一切の人間について云へるのでなければならぬ。たゞ欲求の範圍と強度、従つてまたそれを充足するために環境に働きかけんとする心的緊張の度合に差があるにすぎない。この意欲の弛緩せるものが懶惰であらうが、懶惰な者も創造性ないし活動性を全然もたぬわけではない。怠惰な者も生きて行くためには働かねばならぬ。野蠻人といへども動物とは異なるのである。

人間は、少くとも人類大衆——と云ふのは實は勞働者のことなのであるが——は本來怠惰なものであるといふのは資本主義の人間觀としてイギリス古典經濟學の傳統的信念を形成してゐたやうに思はれる。マルサスだけではなくて、ジョン・ステュアート・ミルなども「人類の自然的懶惰」(The natural indolence of mankind)といふ表現を使用してゐるが、これに似た思想は既にアダム・スミスにも見られないではないのであつて、スミスも努力は必要に比例する、人間を勤勉ならしめるためには何らかの強制もしくは獎勵が必要であるとなしてゐる。就中、彼が最も重要視してゐるのは報酬による勤勉の獎勵である。そのかぎりスミスもまた人間を懶惰なものと考へてゐると云へないことはないであらう。然し彼に於ては、勤勉が主として報酬にかかはらしめられてゐる點からも推察される如く、懶惰といふことは自愛心の消極的發現形態として捉へられてゐるやうに考へられる。然るにマルサスに於ては、懶惰といふことは必ずしも私的利益の追求といふ限定に於ける自愛心と必然的な關係をもつてゐな

7) Principles of Political Economy, p. 793.
8) Wealth of Nations, Vol. II, pp. 249, 250.

い。無論、彼も私的利益の追求を制止すれば勤勉は期待され難いと考へることは云ふまでもない。然し彼が最も強調してゐるのは、人間には私的利益をもつてしても動かすことのできない懶惰性がある、懶惰は實に人間の自然状態であるといふことである。

惟ふに、マルサスの云ふ如く、人間には環境の適當な刺激がなければ怠惰に陥る傾向のあることは否定できないであらう。然し、それは人間の本性ではなく、自覺の缺如ないし不充分といふことから起つてくる傾向と見るべきであらう。人間のもつ傾向がすべて人間の本性に屬するとは考へられない、自覺なくして人間はあり得ないのである。もし自然的懶惰といふことが云はれるならば、自然的といふのは人間の本性にかかはるのではなくて、無自覺的といふことでなければならぬまい。ミルの云ふ「自然的懶惰」といふのはこの意味に近いかと思ふ。人間の本性はどこまでも創造性ないし活動性になければならない、環境から規定されながら環境に働きかけて行くところになければならない。環境によつて規定されつつ環境に働きかけて行くことによつて同時に自己自身を規定し、働きつつ自己自身を見つめることによつて絶えず自己自身を新しく形成して行かうとする意欲すなはち向上の意欲の不充分なところから、怠惰といふことが起つてくるのである。怠惰は自己自身を見つめることが足らず、本當に自己自身を愛さないことから起つてくると考へられる。その意味でそれは、スミスの思想からも推察される如く、自愛心の無自覺的消極的な發現形態と云つてよからう。所謂自愛心は多くの場合向上の意欲にのみかはらしめられるが、そしてマルサスの場合にも同様であつて、彼は自愛心をこの意味に於てのみ重視してゐるが、然し所謂自愛心は常に否定的な側面を具へてゐるといふことを忘れてはならないであらう。單なる自愛心の弊害は積極的に公益を侵害するばかりでなく、その消極的發現によつて公益の増進を阻害するといふ點

にもあるのである。この種の自愛心の發現を防止するために、私的利益の追求を自由に放任して、公益の實現をその無自覺的結果に期待するといふのが個人主義の建前であつたが、私的利益の追求を許容しないやうな經濟體制に於ては全體制の強制と個人的自覺および私益即公益、公益即私益といつた構成をもつ體制のものによつてこのやうな形態に於ける自愛心の發現が防止されねばならないであらう。

なほマルサスの考へる如く人間の自然狀態が懶惰であるとするならば、人間の進歩は如何にして可能であるかと問ふことができるであらう。然し、彼の考へるところでは、救ひは神の手に豫定されてゐる、神は人間を勤勉ならしめるための刺戟として欲求を附與し人口原理を設定したのである。然し如何に刺戟したところで、自覺的創造的でないものには進歩や向上はないであらう。よしあつたにいたところで、人間自身の進歩とは云へないであらう。歴史は人間の作るものではなくて、神の作るものといふことになるであらう。マルサスの思想が非實踐的と云はれなければならない所以である。

三

次に、人間の本性をもつて懶惰となすマルサスの人間觀は人間存在の歴史性ならびに空間性を無視した普遍主義的抽象性をもつと云はなければならないと思ふ。彼がこの種の人間觀を導き出してきたのは主として熱帶の野蠻人とくに南アメリカのインディアンに關する記述からであつた。彼は『經濟學原理』に於ても「懶惰もしくは安逸の愛好 (indolence, or love of ease) といふ一般的にして重要な人間性の原理」を提出してゐるが、そこでもアメリカ・インディアンが豐饒な土地に住みながら、否、豐饒な土地に住むが故に怠惰に陥り、極く少量の食物の生産に満足して便宜品とか奢侈品とか云はるべきもののために勞働しないといふ事實から、便宜品および奢侈品のた

めの勞働に使用される時間の大きさは必ずしも食物のための勞働時間が少いといふことに比例しないといふ推論を引出してゐる。曰く。「もし食物獲得の便宜が懶惰の習慣を生ぜしめるならば、この懶惰は彼をして便宜品や娯樂品を所有するの奢侈よりも殆んど又は全く何もしないであるといふ奢侈 (the luxury of doing little or nothing) を選ばしめるであらう。そしてこの場合には彼は、食物獲得に一層多くの勤勞を使用しなければならぬ場合よりも、便宜品や奢侈品のための仕事に一層少い時間を捧げ、それらを一層僅かしか手に入れないであらう。」⁹⁾

これは決して野蠻状態にのみ特有の現象ではない。文明社會の勞働階級についても同じことが云へるのである。「實際、もし奢侈品や便宜品の生産の主要用具たる人々が彼等の努力に對してそれを享受せんとする欲望よりも強い動機をもたなければ、社會に見出される便宜品や奢侈品の分量は少く且つ乏しいであらう。勞働階級を刺激して奢侈品を生産せしめるのは主として必需品の欲求である。そしてもしこの刺激が除去されたり大いに弱められたりして、その結果、生活必需品が極めて僅かの勞働によつて獲得され得るに至るならば、一層多くの時間が便宜品の生産にあてられる代りに、一層少い時間がそれに當てられるであらうと考へべきあらゆる理由がある。」¹⁰⁾

大體同じ主張が『人口論』にも見られる。曰く。「もし勞働者が二三日の勞働によつて自分自身と家族とを扶養するに充分な生活資料を獲得し得るならば、そして便宜品や奢侈品を獲得するために更に三日か四日働かねばならぬとすれば、彼は一般にそのための犠牲を得らるべき——嚴密に云へば彼にとつて必要でない——對象とくらべて大きすぎると考へ、それ故しばしば改善された住居や衣服の奢侈よりはむしろ怠惰の奢侈 (the luxury of idleness) を選ぶであらう。……他方に於て、勞働者の時間の大部分が食物の獲得に占められるならば、必然的に

9) The Principles of Political Economy by Robert Malthus, Second edition, reprinted by the International Economic Circle, Tokyo 1936, pp. 335—6.
10) ibid. p. 334.

勤勉の習慣が発生し、残りの時間は——それはそれが購買するであらう財に比べると云ふに足らぬものにすぎないけれども——めつたに空費されることはないのである。社會の勞働階級が生活の便宜品や快適品に對して判然たる嗜好をもつやうになることの最も著しいと思はれるのは、このやうな事情の下に於てであり、特にこの事情が善政と結びついた時である。¹¹⁾

右の如くマルサスは主として南米に於けるインディアンに關する記述から人類の自然的懶惰といふことを導き出してゐるのであるが、アメリカ・インディアンはこの性質は最近に於ても變りないらしく、例へば次の如く云はれてゐる。「南アメリカのインディアンは賃銀の増加するに従つて益々働かなくなるのであつて、彼等は一日の賃銀で二日分の食物を買ひ得るならばその勞働時間を半減し、更に賃銀が増加して一日の賃銀で三日分の食物を買ひ得るならばその勞働時間を三分の一に減するのである。この經驗は再三試みられたところであつて、その結果、熱帶勞働者に對して最も同情ある僱主も最も無分別なる僱主と等しく、食物と住居につき現實の必要以上には如何なる好餌をもつてしても一般に彼等を發憤せしめるといふことは出來ぬといふ見解に同意するのである。僱主の深切と同情とは必ずや彼等の忠實を増すであらうが、彼等の向上心と努力とはそのために刺戟されさうにならう。¹²⁾

この種の懶惰ないし不活潑は殆んど總ての熱帶原住民について云へるやうである。然しそれは必ずしも彼等の本性が懶惰であることを示すものとは考へられない。彼等も異つた環境に於ては或る程度異つた性質を示すと云はれるからであり、白人もまた熱帶に於ては墮落すると云はれてゐるからである。同じ著者は熱帶地方に於ける白人の無氣力について次の如く述べてゐる。「熱帶地方に長く滞在した後には強ひて登山の如き肉體的努力を起

11) Principle of Population, 7th ed. p. 375.

12) ハンテントン著、岡崎万里氏譯、氣候と文明、65頁。

さしめることも、又長い推理過程を順々に考へ出すことも等しく困難であつて、その精神は肉體と同様休息を欲する。さうして兩者は刺戟を與へて活動させ得るも、それによつて精力を涸渇せしめるのである。熱帶的無氣力に關する普通の解釋は様々であつて、或は熱帶地域内にあつては給料が高いので烈しい勞働の必要がないためであるとし、或は奴婢の賃銀が低廉なためであるとし、更に過激な勞働は健康に有害なためであるとするものがあるが、『とにかく、ここでは誰も働きたくない』といふ説には殆んど凡てが一致するのである。¹³⁾

マルサスの主張をもつてすれば給料が高いので激しい勞働の必要がないからだといふ解釋が當つてゐさうに思へるが、然しまた彼の説いたやうな目的論的思想に従つて熱帶的無氣力は人類が熱帶に於て過激な勞働をなすべきでない旨を警告する慈悲深き神の掟であると解することができようし、さう解した方が一層適當なやうでもある。蓋し白人が熱帶に於て無理に郷土に於けると同様の勞働を試みるならば、健康を損ずる危険が大きく神經過敏に陥り虚弱となつて熱帶病に犯され易くなると云はれるからである。然し熱帶的無氣力は主として氣候すなはち暑熱やその一樣性の影響に因くと解する方が一層正しいやうに思はれる。要するに、人間の本性は熱帶の原住民に見られる如き怠惰にあるのではない、本來活動的な人間が特定の環境に置かれる場合に怠惰となるのである。然るにマルサスは熱帯住民の怠惰をもつて人間の自然状態となし普遍的な人間性の現れと解するのであるが、特殊の環境に於ける人間に見られる性質をもつて人間一般の本性と解するのは、彼が排撃して止まぬ性急輕率な一般化の抽象と云はなければならないであらう。

尤も、マルサスが勞働者階級の懶惰について述べてゐるところは一面に於て歴史的には妥當するやうな側面をもたぬではなかつた。彼が勞働者階級の懶惰といふことを導き出して來たのは熱帯住民の状態からだけではな

つた。彼は印度やアイルランド等をも引合に出してゐる。然し注意すべきことは、それらの國々が總てイギリスにくらべると經濟的發展のはるかに後れた國であつたことである。總じて後進國の住民は先進國の住民にくらべると向上の意欲が少いといふ意味に於て比較的懶惰であることは争はれない。同じことは、同一の國に於ても、經濟的に進歩した時代とそれ以前の時代とを比較する場合に見られよう。そしてそこにマルサスの主張が肯定されねばならぬ根據をもつのである。

例へばマックス・ウェーバーは、資本主義の成立期に於て資本家は出来高勞賃率を高めることによつて勞働量を増大せしめようと試みたが成功しなかつた、原因は傳統主義 (Traditionalsms) とも呼べるべき前資本主義的勞働者の生活態度にあつたとして、次の如く述べてゐる。「出来高勞賃率を引上げる結果として、一定期間内の勞働量は増加せずしてむしろ減少するといつた場合が非常に多かつた。といふのは、出来高勞賃率が引上げられるのに應じて勞働者は一日の勞働を増加させずに、むしろ減少させたからである。……彼は報酬の多いよりは勞働の少い方を選んだ。彼の考へたのは、できるだけ多量の勞働をすれば一日だけの報酬が得られるか、といふことではなくて、これまでと同じだけの報酬によつて傳統的な欲求を充すためにはどれだけの勞働をすればよいかといふことであつた。これが『傳統主義』と呼ばれるべき生活態度の一つの例である。人間は『生れながら』できるだけ多くの金を儲けようと欲するものではなくて、單にこれまで通りに生活し且つそれに必要なだけを得ようと欲するにすぎない。近代資本主義が人間勞働の強度を高めることによつてその『生産性』を引上げようと始めた時、それを頑強に妨害しつづけたのはかかる前資本主義的經濟勞働の根本動機であつたのであり、今日でさへ資本主義の根柢をなしてゐる勞働階級が(資本主義の立場から見て)『後れて』ゐればゐるだけ何處でもこの種の妨害が

多いのである。……勞賃率を引上げて勞働者の『營利心』(Ewerlissim)に訴へる方法が成功しないならば、その逆の方法すなはち勞賃率を引下げて、勞働者が前と同じ報酬を得るためには前より多量の勞働を餘儀なくされるといふ方法の試みられたことは云ふまでもない。でなくとも、低勞賃が高利潤と關聯をもつてをり、勞賃を多く拂へば利潤はそれだけ減少するやうに思はれた、今日でさへ公平に見ればさう思はれる。資本主義は最初からこの方法を探つてきたのであつて、低勞賃が『生産的』であるといふこと、即ちそれは勞働量を増加させるものであるといふこと、ピーター・ド・ラ・クール (Peter de la Cour) が既に云つてゐる如く民衆は貧しいが故にそして貧しいかぎりには於てのみ働くものであるといふことが、幾世紀を通じて信條ともなつてゐたのである。¹⁴⁾

マルサスもまたこのやうな資本主義的信條の擁護者であつたと云へる。そしてそれは前資本主義的生活態度が勞働階級を支配してゐた段階に於ては眞理性をもち得たのである。然し、このやうな前資本主義的生活態度はウーバーも云つてゐる如く結局は教育によつて即ち勞働者の自覺の高まると共に克服されるのであり、そしてそれと共にこの種の信條もまた修正されざるを得ないのである。而してマルサスの當時イギリスに於てはかかる生活態度は既に克服されてゐたと見ることができる。

既にアダム・スミスは豊かな勞働の報酬は普通人民の勤勉を増進すると斷定してゐる。「勞働の賃銀は勤勉の獎勵者であつて、勤勉はあらゆる人間の性質の如くそれが受取る獎勵に應じて向上するものである。豊富な生活資料は勞働者の體力を増進する。そして彼の生活狀態を改善し彼の生涯を恐らくは安樂かつ豊かに終へんとする愉快な希望は彼を鼓舞してその力を最高度に發揮せしめる。従つて勞賃が高いところでは、我々は常に、それが低いところでもよりも勞働者が活潑にして快活であり且つ敏捷なことを知るであらう。例へばイングランドに於ては

14) Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie von Max Weber, Tübingen 1920, SS. 44-45. 棍山力氏譯、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神、43-44頁。

スコットランドに於けるよりも、大都會の附近に於ては僻遠の田舎に於けるよりもさうである。なるほど、職工のうちには四日間に一週間分の生活費を稼ぐならば、残りの三日間を怠けて暮すといふやうな者もあるであらう。けれども、大部分の職工についてはさうは云へない。反對に、職工は出來高に應じてよい支拂を受ける場合には、どうしても働きすぎて數年のうちにその健康と體格とを壊し易いほどである。……一週間のうち四日間過度に精を出すといふことが、しばしば非常に喧しい不平の種となつてゐる残りの三日間を怠けて暮すといふことの眞實の原因なのである。數日間繼續する精神上ないし肉體上の大勞働は大抵の人々に於て自ら休養に對する大欲望を伴ふものであつて、この欲望はもし強力によつてか又は何か強い必要によつて抑壓されないならば抵抗し難いものである。それは自然の要求であつて、時にはただの安息また時には逸樂や遊興に耽つて救はれる必要があるのである。もしそれが充されないならば、その結果はしばしば危険にして、時としては致命的であり、晚かれ早かれ殆んど常にその職業に特有の病氣を招くものである。もし雇主が理性と人道の命するところに耳を傾けるならば、彼等はしばしば彼等の職工の多くの者の勤勉を刺戟するよりはむしろ緩和する必要があるのである。さらにスマスは豊富な生活資料は勞働者の勤勉を緩め、缺乏は却つてこれを強めるといふ議論を反駁して云つてゐる。「生活資料が普通より少し豊富であるといふことが若干の勞働者を怠惰ならしめるといふことは疑ひ得ない、然しそのことが大部分の人々に對してこのやうな影響をもつとか、一般に人々は食物の充分な時よりは不十分な時、元氣な時よりは意氣沮喪してゐる時、また一般に健康な時よりはしばしば病氣する時の方がよく働くなどと云ふのは全く疑はしいやうに思はれる。」¹⁵⁾と。

リカードもマルサスが援用する南アメリカやアイルランド等の如き進歩の後れた國の狀態はイギリスの如き

進歩した國には適用され得ないと云つてゐる。實際ここではマルサスよりもリカードの方が具體的だと云はねばならぬ。勿論、マルサスがリカードに比し農業により多くの關心をもち、且つ農業労働者の生活態度は幾分後進性をもつといふ事情のあることは見逃すことができないであらう。

四

然しそれにもまして我々の注意を惹くのは、對労働者問題に關するかぎり徹底的なマルサスの資本家的態度である。就中、スミスの労働者階級に對する極めて友好的な態度にくらべると、彼の純資本主義的階級的な立場は蔽ふべくもないであらう。この相違はどこから來るのであらうか。惟ふに、古典經濟學はマルサスの段階に於て初めて一種の社會主義的思想に觸れたのである。この種思想に對して古典經濟學の擁護してきた資本主義の立場を貫かうとして生れてきたのが彼の『人口論』にほかならなかつた。マルサスは、スミスは勿論、リカードよりも新しい問題を擲んでゐたと云へる。而して資本主義がその敵對者の脅威を感じ自己自身を防衛するの必要を感じた時、それを擁護する立場は勢ひその階級的正體を暴露せざるを得なかつたのである。彼は労働階級の永久的必然性を論證し得る理論を求めて人口論に到達したのであるが、労働階級の窮乏の根源たる人口原理がしかもなほ労働階級にとつて積極的意義をもつた神の意圖を體現してゐることを論證するためには労働階級の懶惰といふことを前提しなければならず、この前提の實證的確實性は熱帯住民や後進諸國民の怠惰といふ事實によつて與へられると考へたのである。そのかぎり、彼の歴史的實證的研究も階級的な彼の實踐的關心によつて規定されてゐたと云へる。

このことは、人口原理ばかりでなく、人口原理を意味づけるに當つて據り所とされた人間觀そのものがまた直

16) D. Ricardo, Notes on Malthus' "Principles of Political Economy", p. 181, p. 185.

接コンドルセーやゴドウィンさらにはオーエン等の唱導した所謂平等制度に對する反對論據としての役割をつとめてゐることを見る場合に、一層明白となる。彼の見るところによれば、「境遇の不平等が善行の自然的褒賞を與へ廣く且つ一般に社會に於ける向上の希望と没落の恐怖を鼓吹するやうな状態は疑ひもなく人間の精力と才能とを最もよく發展させるやうに思はれるし、且つ人間の徳の實踐と改善に最も適してゐる、而して歴史は從來平等状態が現れたあらゆる場合に一樣に、この刺戟の缺如から沈滞と無氣力といふ結果の起つてくることを證據だててゐる。」すなはち「平等状態は、經驗上から見ても理論上から見ても、そのみが人間の自然的懶惰を克服し、人間を促して土地を適當に耕作せしめ、彼の幸福に必要な便宜品や奢侈品や娛樂品を製造せしめる努力に對する刺戟を作り出すのに不適當である。」¹⁷⁾この議論こそは實にマルサスが所謂平等制度に對して放つた決定的反對論の一つであつたのである。

尤もマルサスも刺戟の過大もしくは過小すなはち極貧もしくは冗富は同様に不都合であつて、社會の中間層が精神の發展に最も適してゐると考へ、極端な階層にある人數を減少せしめ中間層にある人數を増加せしめる如き政治様式を見出すことができるならば、それを採用するは疑ひもなく我々の義務であらうと主張してゐる。¹⁸⁾殊に第二論文に於ては、ヨーロッパ諸國家に於ける上中下の三階級の相對的比率が異なるといふところから、社會大衆の幸福の増進を中等階級の相對的比例の増大に期待してよいと云つてゐる。¹⁹⁾然しそこでマルサスが一部分なほ空想的に期待してゐるところは、マルサスの評してゐる如く、市民社會の實際的發展過程だと云つてよい。蓋し謂ふところの中等階級とは市民階級のことであり、下層階級の減少は絶對的ではなくて相對的であるにすぎないからである。實際、彼が認めたのは下層階級の相對的減少であつて、それをなくしてしまふことではない。彼の見

17) Principle of Population, 7th ed., p. 283.

18) First Essay, p. 369.

19) Principle of Population, 7th ed., p. 474.

るところによれば、下層階級の存在は絶対に必要であつたのである。

「社會の中間部分は道德的にして勤勉な習慣およびあらゆる種類の才能の發達にとつて最も好都合なものであるといふことが一般に知られてゐる。然し總てが中間部分にあり得ないことは明白である。上層部分と下層部分とは事物の性質上絶対に必要であり、且つ必要であるばかりでなく極めて有益なものである。もし何人も社會に於て向上を希望することができず没落を恐怖するに及ばないならば、もし勤勉がその褒賞をもたらさず懶惰がその懲罰をもたらさないならば、我々は今日公共の繁榮の主要發條を形成してゐる我々の狀態を改善せんとする活潑な活動を期待できないであらう。」²⁰⁾

環境の適當な刺戟がなければ我々が怠惰に陥るといふ傾向をもつことは否定できないであらう。然し、だからと云つて、その刺戟が富の平等とくに貧困でなければならぬといふことにはならないであらう。社會主義なし共產主義といへども決して勤勉な者と怠惰な者とを同一に扱ひなどするものではないと云はれるであらう。或はまたポナーの批評にもある如く、貧者と富者とを接近させつつ而も努力への刺戟を除去しないやうな制度も可能であるとも云はれるであらう。²¹⁾實のところ、マルサス自身もこの種の反對論を一部分豫想し、自己の主張の弱點を意識してゐた。即ち、彼の議論に對し、「歴史が實際に行はれた平等制度に關して記録する事例は極めて少く、かつ野蠻狀態を殆んど出でない社會に於て行はれたものであつて、偉大な文明と進歩の時代に關する公平な結論を提供し得るものではない、平等狀態にかなり近づいた古代の他の事例に於ては、人間努力の若干の面に於て著しい性格の力が發揮された例が稀でない、而して現代に於ても特にモラヴィア人のその如き若干の社會はその勤勉を阻害することなしに財産の多くを共有してきたと知られてゐる」とか、「境遇の平等といふ刺

20) ibid. pp. 473-474.

21) J. Bonar, Malthus and his Work, 2nd ed., p. 382. 邦譯, 525頁.

戟が人間を野蠻生活の懶惰と無感覺から文明生活の活動と知能にまで引上げるために必要であつたとしても、精神のこの活動と精力が一度獲得された時に、なほ同じ刺戟の繼續が必要だといふことにはならない」とか云はれるであらう。これらの評言は人間の性格を研究してきた人々を納得させる如き性質のものではないが、然し或る程度もつともらしく、經驗も理論もこれを反駁して平等制度の實驗に關する提案を不合理なものたらしめるほど決定的確實性をもち得ない²²⁾と。そこで彼は何人も疑ふを得ないと考へられる人口原理を提出するのである。

然し人口原理が人間の本性を懶惰と見る人間觀を前提して初めて大膽率直に闡明され得るが如き性質のものであること、その意味でこの種の人間觀が人口原理を基礎づけてゐると云ひ得ることは既に述べた通りである。

のみならず、人口原理が非個人主義的體の不可能なことに對する決定的論據たり得るためは個人主義の立場そのものが、前提されねばならぬ。個人主義の立場から見れば人口法則は全くの自然法則であるが、然しそれは同時に歴史的社會的な側面をもち、社會總體の意識的活動によつて單に支配され得るのみならず變更され得るといつた側面をもつてゐる。さうである以上、人口原理は必ずしも非個人主義的體制の不可能なことに對する決定的論據たり得るものではない。實際、マルサスもこの種の體制の可能性を全然否定したのではない、人口原理の作用を考慮に入れた場合にさへその可能性を全然否定したのではないと解される節があるのである。勤勉に對する刺戟といふ觀點から見た場合にも同じことが云へる。彼もまた富の不平等を前提せずして、而も勤勉に對する刺戟を残し得るやうな體制のあり得ることを認めなかつたのではない。然し彼は、この種の體制が存續し得るためには強大な權力が前提されねばならぬと考へ、しかも個人的自由主義者としてこの權力を嫌惡したが故に、かかる體制を拒否したのである。この種の體制の存續が強大な權力を前提するといふ彼の洞察は、この點に關する見

通に於て缺けるところのあつた無政府主義者や空想的社會主義者に比し、はるかに正しく且つ鋭いものがあつたと云はねばなるまい。この間の事情について詳しくは別の機會に譲りたい。ともかく、平等制度に對する反對論も結局は單なる理論を越えて個人的自由の信念に落着くのである。

個人的自由主義の立場とそれに基く個人主義體制の擁護、それがマルサス理解の鍵と云つてよい。ボーナーの云ふ如く「マルサスの原理は決して反動的ではなく、當時說かれてゐた恐らくは最も進歩した個人主義であつた」と云つてよからうと思ふ。但しそれは飽くまでも市民社會の立場から見ての話である。そのかぎり、スミスは云ふに及ばず、リカードよりも彼は新しい問題を擱んでゐたと云へる。資本主義の保持發展のためには、一見反動的とも見える地主階級の擁護も餘儀なき妥協であつたと云へぬではない。またそのためには或る程度「勞働貧民すなはち多數の人民」の利益を犠牲にして攻勢に出ることも止むを得なかつたのである。長い目で見た資本主義の發展は事實に於て彼の議論に有利であつた。スミスおよび特にリカードの理論は社會主義と結びつくやうな側面をもつてゐたけれども、マルサスの理論は決してそのやうな性質をもつてはゐなかつた。個人主義は彼に於て臆面なくその階級の本質を露呈してきてゐる。「人口論」の根柢をなす思想のうち、この傾向が最も明白に現れてゐるのは人間觀に於てである。私がその批判をこの部分に集中したのはこのためである。

以上、私は「人口論」の根柢となつてゐるマルサスの人間觀を述べて結局それが個人主義の立場に歸着することを見たのであるが、なほ同じ立場を表明せるものとして自愛心と他愛心に關する問題があるが、必ずしも「人口論」の基礎とは云へないし、また今それに立入る餘裕がない。